

第4 1回水の都ひろしま推進協議会【議事録】

1. 日 時 平成30年(2018年)3月20日(火) 13:00~14:30
2. 場 所 南区役所 4階 第2・3会議室
3. 出席者 別紙出席者名簿参照
4. 協議概要 以下のとおり

< I 開 会 >

< II 議 事 >

1. 審議事項

- (1) 平成29年度収支予算の変更について
—原案のとおり承認—
- (2) 平成29年度事業報告(見込み)及び収支決算(見込み)について
—原案のとおり承認—
- (3) 平成30年度事業計画(案)及び収支予算(案)について
—原案のとおり承認—
- (4) 河川敷地占用許可準則に基づく都市・地域再生等利用区域の指定等の継続について(水辺のコンサート)
—原案のとおり承認—

2. その他

- 「水の都ひろしま」づくりに関する意見交換
—委員による意見交換を実施—

《事務局》

水辺のオープンカフェは建設予定のところは全て終了した。川の駅も今年度に建設が終了し、にぎわい作りの段階に入っていることから、水の都ひろしま推進協議会として新たな事業を模索していかなければならないと考えている。

まずは、意見交換として新規事業の提案を頂き、事務局で取りまとめ、再度語りたいと考えている。オープンカフェが増えて若干原資もあることから、新規事業の展開に充てる事もできる。

《市川委員》

この事業は開始から既に13年が経過しており、他の都市よりも歴史がある。加えて広島取り組みは、他の都市と比べても非常に上手くいっている事例である。広島大きな特徴が、法律で一番厳しい河川で行っているということである。これは、法改正の特例措置によるもので、店舗の設置等の民間の営利行為が可能になったことに起因する。特に、独立店舗で設置したのは広島が全国で初の事例である。公平性の担保だけでなく協賛金を使って多くのイベントをやっているのもおそらく全国で広島のみである。つまり、スポット的な店舗の設置をそのスポット的なエリアの利益にとどめるのではなく、それを起爆剤にまちづくりに展開している点が広島最大の大きな特徴といえる。

他の都市の事例を紹介すると、福岡では、ビルのオーナーの要望により1店舗で始動している。大きくは広島の事業スキームをコピーしているものであるが、異なる点は、推進協議会の下に準備会というのが付いている点である。つまり、決まった組織が定期的に何かやっているのではなく、この事例が発生したからとりあえず起こしたというスタンスで、実際は機能していない。自治体もやる気がなく、2店舗目が出てこない状況である。

大阪の土佐堀川の北浜テラスの事例では、福岡同様、行政主導ではなく個人のビルオーナーが要望したことにより、3店舗で始動している。現在ではおおよそ10店舗まで増えており、利用者数は広島とほぼ同等である。一方、堂島川では、形としてはほぼPFIで、地下鉄の駅を整備するに伴い、地上に大きな敷地ができたので、テナントを募集する形で始動している。道路側に壁があるなど、まちとのつながりが考えられていない。2年経過後もテナントにお店が入らなかった。地下鉄の駅自体、利用者が少なく立地特性を読んでない事例といえる。

名古屋の事例では、敷地が狭く、当然協賛金も十分に得られず、少数店舗にとどまっている。

千葉の事例では、利根川に大規模な道の駅や防災ステーションを整備しているが、現在では、社会実験事業というよりも単なる国の事業であるという解釈に至り、「水辺のオープン化」事業から除外されている。

以上の事例からも、いろいろと工夫してやっているのが大阪と広島であり、広島のみが第三者事業者が参入でき、そこからさらに得られた協賛金を使ってまちづくりの発展に貢献することができるといえる。

最後に、東京の事例を紹介する。隅田川と日本橋川で、行政の方で公募した後にテラスを整備して、そこに店舗を出すということをやっているが、お店の人が「店舗敷地を増やしたい。儲けたい。」という要望で行っているだけで、周辺地域のまちづくりに注力しているものではない。

各都市の事業スキームをまとめると、3つのタイプがある。1つは広島が行っているAタイプ。まさに、特例措置による効果を調べる社会実験をしてきたという重要なスキームの形で、行政という大きな組織と民間事業者との間に協議会が入っている。

Bタイプは、協議会は存在するが、外野から行政にコメントしているだけで、事業者とは何ら接触もなく社会実験の目的を満たしていない。

Cタイプは北浜テラスのようなタイプ。そこにビルがあるかないか、ビルがあればビルオーナーしかできないので、公募の必要もなければそもそも協議会を作る必要がないというスタンス。

Aのタイプのような、その場の店舗から得た協賛金を使ってまちに貢献するということを実践しているのはおそらく広島のみで、今後何か考える際、全国に誇れる現在の取り組みをさらにバージョンアップしていくようなことをしていただければ、私の方でも学会や書籍等でPRしていくので、何かアイデアを出していただければと思う。

《西名会長》

広島が実践している事業スキームが、そもそも他の地域には無いものであるので、原資や協賛金をいかして、「水の都ひろしま」としての発展につながっていくような何らかのアイデアや意見等をいただければと思う。

《辻委員》

現在、水辺のオープンカフェが大きく成功しているが、今後の整備計画はあるのか。

今日いろんな事業が増えており、例えば、アート事業として水辺のコンサートがある。今度は、「水辺のオープンアトリエ」のような、芸術性のあるものを水辺で見るといのが、心休まる水辺という広島の目指している形になるのではないかと。せっかく予算があるので、新しいコンサートだけでなく、他の芸術性の高いものに利用されても良いのではないかとと思う。

《西名会長》

確かにオープンアトリエは良さそうだ。その場に作品があると、憩いの場として休みにやってくる人達が期待できるし、アート鑑賞となると時間を要するため、歩き疲れた人がオープンカフェでくつろぐことにつながってもいいと思う。

《藤原委員》

中国地方整備局も積極的に関わりを持たせていただければと思っている。広島の特徴として、川に面したところの舟運的な利活用もあるのではないかと考えている。県の管理の部分もあるのだろうが、いろいろな面で国としても関わりが持てればと思うので、発展的に議論ができればと思っている。

《西名会長》

現在でも、例えば雁木タクシーや遊覧船などの取組があるが、水空間をいかして、もっと多くの人が行き交うことが出来ると、にぎわいも創出されるのではないかと考える。国土交通省の方でも理解が得られそうだとすることであれば、新しいアイデアも出しやすくなるのではないかと考える。

《山本副会長》

これまでの水辺というと、雁木タクシーのような自分達が行って乗っかるという感じがあるが、私としては、水辺を教育の場には出来ないかというも思う。誰かが作ったものに乗っかるばかりではなく、「自分達がまちづくりに関わっていく人材になっていくんだ」と思わせるために、例えば、川の今の状況を、体験型事業で知ってもらったりするというような事が重要なのではないかと考える。

先ほどのオープンアトリエの例が良いと思えるのは、教育の場に使えるという事である。観光の人達だけでなく、地域にいる広島の子供たちに川を身近に感じてもらい、好きになってもらうことで、未来の「水の都ひろしま」が見えてくるのではないかと考える。そういう意味では、人材育成を川でしていくような観点もあっていいのではないかと感じる。「川に来て楽しかった」でやめてはだめ。例えば、「なぜ、このカヌーをするのか。水の旅があって、森が水をはぐくみ、そして川から海へ」というストーリーや、「植物しか太陽エネルギーを活力に変えることはできず、それをいただくことで、我々はエネルギーを得ているんだ」といった生物の営みや命の営みと水との繋がりのような環境教育をした上で、「今日はカヌーを楽しもう」という気持ちにさせることができればいいと思う。

《西名会長》

教育につなげるなどのストーリーのあることが重要であるという意見には賛同できる。この協議会の活動からは離れてしまうかもしれないが、広島の高校や中学でも、そういった教育を行っていただけるような先生方がもし出てくるようであれば、広島に対する見方が子供の頃から少し変わっていくのではないかと考える。

また、広島に観光で来られた方だけではなく、地域の人達にもどんどん学んでもらいたいという意見にも同感である。これだけいろいろな誇るべきところがある広島に対して、残念ながらよく知っている人が多くないので、おもてなしをする側がもう少し理解をして、誇りを持ってお迎えできるようになっていくのが良いのではないかと私自身も思う。他はいかがか。

《梅木委員》

今日、この資料を見せていただいて、いくつか提案がある。

一つは、先ほどから話が出ている雁木タクシー。非常に魅力的だが、はたして成功しているのか。つまり、儲かっているのかという点と、まだまだやらなくてはならないことがあると思う。

さらには、カフェ。先月、県外からの観光客の方を元安橋のカフェに御案内したが、「広島にこんなところがあったのか。すごい。」とおっしゃっていた。この船とカフェを上手く結びつけるようなことがあれば相乗効果で良くなるのではないかと考える。例えば、カフェに行くのに船を使ってもらい、或いは、カフェで食事をした方に船で帰っていただくポイントラリー式・割引式の共通チケットのようなものである。さらには、雁木タクシー乗船所をカフェで案内できるような掲示物であったりと、そのようなアイデアが浮かんだ。

《西名会長》

今にも実現しそうな非常に具体的なアイデアで、両方上手く使うてもらいたいという仕組みが良い。他はいかがか。

《隆杉委員》

私たちは市民の活動者をいつも心配して見ているが、協議会は、観光や営利活動というところに軸足があるような感じがする。最近、横川の方でも「ガワフェス」や、猿猴川での「えんこうさん」、「カープ祭り」といった市民の活動が盛んに行われているが、推進協議会の中でまとめられていないのではないかとと思われる。その点をまとめられれば、オープンアトリエも、もっとステップアップした案になっていくのではないと思う。営利が目的ではなく市民の活動としてやっているということと、新しい試みを結びつけていけば、よりよい取組ができるのではないかと思った。

また、広島ของ素晴らしいところについて市民が知らないというところは少し問題に思う。そこをどう底上げしていくのかというのが一つテーマではないかなと思っている。

《西名会長》

確かに、ここの場だと、元安川や京橋川のカフェが議題として上がってくるが、その他にも、天満川、太田川放水路、そして猿猴川などいろいろな川を広島は持っており、隆杉委員の御指摘のようにいろいろな活動がその場所その場所で行われているのではないかと期待している。そういった活動に対して、すぐさま協議会として援助というのも難しいところではあるが、もう少し広域的に視野を広げていく事も必要なのだろうと思う。今あるカフェの活動が、ある程度落ち着いてきている前提とするならば、それをもう少し広げていく等の予算の充当もあり得るという気はする。

《阪谷委員》

先日、太田川放水路完成 50 周年のシンポジウムが開催された。出席した市議会議員から、3月の市議会において、「今後、この素晴らしい広島の水辺作りをどうやってもっと拡大していくのか。」という質問があった。その時にお答えしたのが、舟運である。例えば、川を使って海へ出たり、川の中を回っていくというようなことである。当然、その際には、雁木の整備等もあるので、国や県あるいは民間事業者と協議しながら進めていきたいと思っている。

また、事業者から、どんどんやりたいという声が出ているものに SUP というものがある。最近、猿猴川や天満川で SUP をしている方がいる。その方々に協力してもらいながら、川を SUP で縦断し、河川環境を見ることで、広島川が一体どうなっているのか、さらには、河岸をきれいにしていってどうかと思わせるようなストーリーを作って、教育的かつ体験型の取組を行うのも良いのではないと思う。

さらに、天満川と太田川に分かれ道のところ、横川橋の下流に向かって右岸の辺りで、地元の方々が、例えばカフェや河岸を使ったいろんな催しが出来ないかという様なことを以前おっしゃっていた。そこで面的な新たな展開をやってみてはどうかとも考えているので、また一度、地元の方の意見を聞いてみたいと思っている。

《箱田委員》

元々、この推進協議会やその根底にある水の都ひろしま構想は、国、県、広島市、さらには市民の方も一緒になって、ワークショップを開催しながら構想を作っていた。その当時は、事務局の一員として参加させていただいたが、その中でうっすらと覚えているのが、水の都として盛り上げていく中で、「川を、花で飾りましょう。」という案が一つあった気がする。

さらには、「川を、晴れの舞台にしましょう。」というような言葉もあった記憶がある。以降は市民の方の意見だったかもしれないが、例えば、川辺で結婚式を挙げるといった、市民を巻き込んだいろいろなイベントをやってみてはどうかという声があったように記憶している。川辺を花で飾り、川から街を見たときに、そういう情景が見られるような川づくりをしてみようという提案も記憶している。

現在、「水の都ひろしま」構想の中から、京橋川・元安川での取り組みを集中的に行っているが、やはり、もう少し面的に広げて、市民の方も巻き込んで、例えば、ラブリバー制度などを広島県ではやっているが、花の種をあげる、或いはプランターを並べて世話していただくというよう取り組みに、金銭的に余裕があるのであれば、使ってみるのも手ではないかというような気もする。

《市川委員》

古くから見ている立場としての意見を一つ。基町環境護岸の環境は非常に美しい。ここは、土木学会のデザイン賞の大賞をとっている。一つの特徴として、堤防の少し上の方に基壇のような少しカクカクした石積みで水平の土地を作ったような形になっているものがある。これを設計された中村先生は、現在、東京にいらっしゃるのだが、20年以上も前に当時の担当者から伝え聞いた話によると、その当時は法律的には無理であっても、いつかここに飲食の施設が出来てほしいという思いでデザインされたものであるということであった。「だから、そこにつくれ。」という話ではないが、当然時代は変わっているけれども、当時の思いを、皆さんをお呼びして聞くのも重要ではないか。

つまり、いろいろな案は浮かぶがどれも決め手がない。そこで、もう一度ゼロから広島の水辺がどうあるべきかを、歴史も踏まえて考えてみるという会を設けてみてもいいのではないかという気がする。参加者もよりオープンにして、いろいろな意見をそこで募るという事を是非行ってほしい。

中村先生も話してみたいということだったので、今のうちに是非という思いがある。

《隆杉委員》

補足になるが、中村先生も高齢になられ、現在、先生の作品を本にして出版されようとしている。それが、広島からおそらく出版される。先生がデザインされた意図などを先生ご自身に直接、聞ける最後のチャンスかもしれないので、2018年度中には実現させてほしいという思いがある。

《山本副会長》

講演会、ワークショップのようなものが出来たらいい。

《市川委員》

さらには、そこで推進協議会のPRをすることで、参加者に取り組みを伝えるチャンスにもなるかもしれない。

《西名会長》

シンポジウムや講演会、或いはそのワークショップ等は、教育的な面でも良いのではないかと思うし、そのような試みであれば、推進協議会がお金を出さなくても、例えば、私もいろいろな学会に所属しているので、そういったところからの補助をいただいて、コラボレートして開催するという事も、また是非前向きに考えてもらいたいという風に思う。

<Ⅲ 閉 会>

以上